広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

ジャズ発祥の地・神戸から廃レコードを貼り合せた眼鏡を提案

川谷　萌　兵庫／眼鏡職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠研究所）らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

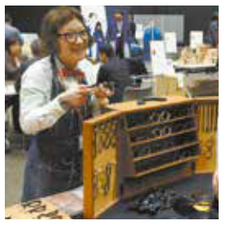
1月17日、プレゼンテーションにて

プレゼンテーションの様子

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI～新しい匠、新しい暮らし～」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「匠」と「地域」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

兵庫県選出の匠、川谷萌さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。


商談の様子

スーパーバイザー
小山　薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

もっと自由にメガネをつくりたい

眼鏡量販店の台頭で、以前に比べればデザインの選択肢が増え、しかも割安で眼鏡が手に入るようになった。一方で失われたものもある。「流行にそぐわないデザインの眼鏡はすぐに淘汰され、店に並べられなくなる。直接産地に生産を依頼しても少数では断られてしまう」。神戸市内で眼鏡セレクトショップを2店営む、めがね舎ストライクの代表、比嘉大輔さんは言う。「一人ひとりの好みやライススタイル、顔に合わせた眼鏡をつくろうとすれば、このスタイルにいかざるを得なかった」と、自ら職人を育て、工房を作るに至った経緯を語る。

めがね舎ストライク

「眼鏡をつくってみようと思う人はおらんやろか」。比嘉さんが店の販売スタッフにそう声をかけると、一人の手が挙がった。川谷さんだ。「もともとものをつくることは好きだった。仕入先の工場を見て眼鏡づくりにも興味がわいていたのでこんなチャンスはないと思った」という。神戸市内に新たに工房を借りて、眼鏡製造に必要な機械一式をそろえた。眼鏡産地の福井県鯖江市から職人に来てもらい、機械の操作、製造のコツを学んだ。中でも難度が高いのは、出来上がったフレームやつるの部分をバフと呼ばれる機械で磨く工程。フレームを当てる圧力、角度、時間を間違えるとムラが生じ、熱で溶けてしまうこともある。「気がついたらまる一日バフと格闘していることもあった」。眼鏡職人が「磨き屋」とも呼ばれるゆえんだ。

工房の風景

エリア・コンサルティングの様子

2年の修業期間を経て、オーダーメードの受注を始めたのが4年前のこと。昼間は店に立ち、夜に工房にこもる日々が続いた。「どこまで自分はできているんだろうか」。不安にさいなまれることもあるが、うれしそうに眼鏡をかけて帰られるお客、リピーターになってもらえるお客が増えるたび充実感を覚えた。

ビル・エヴァンスでストーリーに厚み

LEXUS NEW TAKUMI PROJECTの話を聞いたときは「職人としての経験が浅い私でもチャレンジできるなら」と意気に感じたという川谷さん。そして比嘉さんはつくりあげるものに神戸らしさをどう吹き込むかを考えた。「メガネ産地は福井県なので神戸からメガネをというのはおこがましいと思い、はじめはメガネの素材に使うアセテートを使って神戸らしさを表現するアクセサリーをつくろうと思った」。だが思い直す。「ちょうどその頃、廃レコードを曲げてうちわや蝶ネクタイなどさまざまな商品に仕上げる人と知り合う機会があった。レコードは素材としての耐久性が強い上、聴けなくなったレコード盤に新たな価値を与えられる。「神戸は日本のジャズの発祥地。レコードを貼り合わせたメガネは他にはなく、神戸らしさが出せるのでは」とひらめいた。「やはりメガネで勝負しよう」と。

さっそく試作にかかった。あらかじめアセテートの上にレコードを貼り付け、それから切削する。「何とか形にはできそうだ」と手応えをつかんだ時、下川氏が工房を訪ねてきた。レコードを使うだけではストーリー性が足りないと感じた下川氏は「メガネをかけているジャズプレーヤーのメガネを模してみては」とアドバイスした。往年の名ジャズピアニスト、ビル・エヴァンスの名前が挙がった。さらに調べてみると、エヴァンスが最後に来日した際に神戸のライブハウスで演奏したこと、また神戸で演奏した時の音源が残っていることも判明。ストーリーに色彩が加わった。エヴァンスがかけているいくつかのメガネの中からデザインを選ぶことに決めた。また、よりレコードをイメージできるようメガネのテンプル（横部分）にも使用する工夫も追加した。

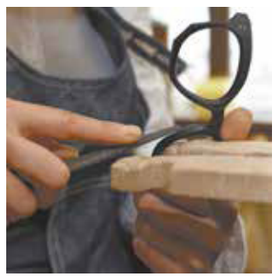
完成プロダクト「Record glasses」

壁を乗り越え、職人としての自信に

だが、そこで大きな困難が立ちはだかる。アセテートと塩化ビニール製のレコード盤をしっかりと密着させるのに適した耐熱性の接着剤が見つからないのだ。10種類ほど試したが、どれもはがれたり、すき間ができたりした。どうにも埒が明かずあきらめかけた。人知れず涙する川谷さんを見ながら比嘉さんはあえて様子見を決めた。「ここを乗り越えてこそひと皮剥ける」と信じて。その後接着剤メーカーに片っ端から電話をかけ、ようやく見つけたのが商談会直前のタイミングだった。「Record glasses」を通じて「壁に突き当たったとしても必ず道は開ける」ことに気付けたと川谷さんは言う。

今春にはアパレル、メガネの展示会に相次いで出展する。ジャズピアニストにメガネをかけて演奏してもらうジャズライブの企画も温めているところだ。「今回の挑戦で経験したことを今後の活動に生かしていきたい」と川谷さん。Record glassesからこだわりのメガネづくりの発想がさらに広がろうとしている。

川谷さんの作業風景


川谷さんの作業風景

川谷　萌
兵庫／眼鏡職人

1982年兵庫県神戸市生まれ。
学生の頃、眼鏡の造形に惹かれ2005年眼鏡店に就職。販売員として10年以上経験を重ねる一方で、2013年から眼鏡職人を目指し、製造を始める。2015年から眼鏡職人 雨田大輔に師事し、「自分でしか作れない眼鏡をつくりたい。」「自分の作った眼鏡をかけたいと思う人が一人でもふえるように。」そんな想いを胸に日々眼鏡作りに打ち込む。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT